

音楽

改革開放下の中国ポップス事情

「革命歌」ポップスから重金属
そしてアイドルの誕生

橋爪大三郎



酒神曲
妹妹你大胆地往前走
紅高粱



姜文ほか『紅高粱』1988 北京高教音像出版社
張芸謀監督の映画「紅高粱」がベルリン映画祭で金熊賞をとり、国内でも大変な話題となった。西北風のにおいがふんぷんする挿入歌「酒神歌」「妹妹你大胆地往前走」も、ビッグヒットになった。寧利と一緒に主演した姜文が、この2曲を唱えているのがこのカセットだ。賞状をもらってニコニコしている写真は、彼である。ほかに、陳凱歌監督の「黄色い大地」の挿入歌「女兒歌」や、そのほかの民謡が西北風にアレンジされて11曲収められている。



劉歡ほか『黄土風情』1988 中国電影出版社
「黄土高坡」「信天游」から「一無所有」「南泥湾」、あまり関係ない民謡まで30曲を寄せ集めた「西北風チャンチャカチャン」である。似たようなテープが多いなかで、これはテンポもよく、いちばん聴きたえがある。唱っているのは、劉歡、范琳琳、張也、彭健亮といった実力派の歌手たちだ。踊りやすいので、もしかしたらディスコ・サウンドの役割もあるのかも。



崔健ほか『開天闢地』1988 永聲音楽出版有限公司
中国大陸の最新流行音楽を、まとめて香港で紹介する初めてのオムニバステープ。ジャケットが凝っていて、窓から兄と弟が外をのぞいている。兄の目のところに影がある(外を見てはいけない)が、弟はしっかり外を見ている。ジャケットの裏は、窓が開いて弟が外へ出ようとしているところ。田震、王迪、孫国慶といった硬派のシンガーが、さびの効いた唄いぶりを聞かせてくれている。国外でかなりの評判をよんだアルバムだ。



蘇越『血染的風采』中国録音録像出版社
天安門事件の直後、香港は連日のように民主化を求める数十万人のデモ隊に埋めつくされたが、そのときラジオから一日中流れていたのが「血染的風采」だった。「私が倒れて起き上がらなくても、悲しまなくていい、中国の国旗のうしろに、私の雄姿がうつっているのだから……」と唄う歌詞は、悲しくも勇壮で、天安門の学生たちに愛唱され、6月4日のあと、事件のシンボルみたいになってしまったのである。作曲者の蘇越は「黄土高坡」も作曲した西北風のリーダーのひとり。このアルバムで「血染的風采」を唄うのは、彭麗媛で、ほかに王虹、崔健、董文華ら14名が参加している。

范琳琳・劉歡『信天游』
1988 内蒙古音像出版社
「信天游」とは、陝北の民謡の総称。解承強がそれを題名にした曲をつくり、ヒットした。このテープは、「信天游」ほか6曲のディスコ(ディスコ)アレンジを収めているが、リズム・ボックスにシンセサイザーという単純な編成が泣けてくる。歌唱のほうは、范琳琳の張りのある声が魅力的だ。



蘇越『血染的風采』中国録音録像出版社
天安門事件の直後、香港は連日のように民主化を求める数十万人のデモ隊に埋めつくされたが、そのときラジオから一日中流れていたのが「血染的風采」だった。「私が倒れて起き上がらなくても、悲しまなくていい、中国の国旗のうしろに、私の雄姿がうつっているのだから……」と唄う歌詞は、悲しくも勇壮で、天安門の学生たちに愛唱され、6月4日のあと、事件のシンボルみたいになってしまったのである。作曲者の蘇越は「黄土高坡」も作曲した西北風のリーダーのひとり。このアルバムで「血染的風采」を唄うのは、彭麗媛で、ほかに王虹、崔健、董文華ら14名が参加している。

硬派・骨太な
「西北風」

そこへ一九七九年、鄧小平の号令で改革開放政策がスタートした。ポップスも自由化され、甘い恋の歌やアイドルソングなど、香港や台湾のポップスが入ってくると大

中国は大きな国なので、日本と違い、どこでどんな音楽が流行っているか、ひとくちで語るのは容易なことではない。そこでまず、基本的な事実から押さえていこう。多くの発展途上国と同じく、中国ではレコードが普及せず、媒体はもっぱらカセットである。CDも一部にはあるが、ダビングのできるラジカセが、音楽好きには必需品だ。いつばう中国の特徴は、文化大革命の影響もあって、長いあいだ歌謡曲やポップスが禁止されていたこと。ビートルズもジャズもロックもパンクも、一切シャットアウトされ、人びとは毛沢東を讃える歌だの軍歌だのを口ずさむしかなかった。日本の戦時中と思えばよい。



張楚ほか『中国火』
1992 滾石有聲出版社有限公司

中国北京レゲエ楽隊『北京レゲエ』
1993 ブルース・インターアクションズ

黒豹も唐朝も、いまや押しも押されぬビッグネームになっている。CDはそれぞれ台湾から発売されており、WAVEあたりで簡単に買える。中国では圧倒的な人気だ。テクといい、音質といい、外国のロックと遜色ないのだが、私にはよその国のヘビメタと同じに聞こえてしまっていて、もうひとつ感心しない。中国語の本格的なバンドがほかにないから受けているのではとってしまう。

私としては、あとの2枚のほうがおすすめだ。「中国火」は、黒豹、唐朝のほか、紅色部隊、自我教育、面孔楽隊などといったバンドも紹介されていて、北京のロックシーンは、いまだたいこんな感じなのかなと想像できる。「北京レゲエ」のほうはもっと愉快。ADOバンドのメンバーを中心に、王迪、王晓芳など、中国の一流アーティストが参加している。「南泥湾」「大生産」「学習雷锋好榜样」などのナツメロが、彼らの手にかかるとうまく新しい色合いを帯びて生き返ってくる。レゲエは北京に合うよ



黒豹樂隊
HEI BAO

黒豹『黒豹』1992 滾石有聲出版社有限公司



唐朝『唐朝』

1992 滾石有聲出版社有限公司

うだ。

話は変わるが、天安門事件の前年、北京の工人体育館でたまたま観たコンサートは、「霹靂風」(ブレイクダンス風)と銘打って、少年隊みたいな連中が出てきて歌あり踊りありの奇妙なものだった。聞けば前年あたりから中高生のあいだで、ブレイクダンスが大流行りだったという。ブレイクダンスが流行るには、失業した若者が町にあふれている必要があるが、「待業青年」の多かった北京は立派にその条件をクリアーしていたのである。

文学、映画、音楽、絵画、哲学、思想……と、八〇年代後半の北京には、アヴァンギャルドな熱気がたぎっていた。九〇年代にはそれが伏流を余儀なくされたが、別な見方からすれば、それが大衆に広く受け入れられつつあるとも言える。「社会主義市場経済」という、道なき道を進む大国・中国の文化状況から、われわれは目を離すわけにはいかないと思うのである。

ブルジョワ腐敗文化」とされてきた関係で、中央電視台(国営の全国テレビネット)などにはまだ登場できないのだが、海外アーティストの公演が増えたり、香港のスターテレビが視聴できるようにもなったりで、情報ギャップは急速に埋まりつつある。彼らの最近の演奏を聴いてみると、技術的にはほとんど日本と差がない。

かと思うと、双子のアイドル歌手「兄弟」が音楽事務所(日本のシステムを研究し、中国ではじめての音楽事務所が九一年の暮に誕生した)のオーディションからデビューしてカセット五十万本の大ヒットを飛ばしたり、ナツメロのリメイク「紅太陽」(毛沢東時代の革命歌や軍歌を、ポップス調にアレンジしたもの)が突然大当たりしたりと、なにがなんだかわからないのが中国の音楽シーンである。日本の戦後音楽史五十年に相当する変化をわずか十数年で経験してしまったので、「東京ブギウギ」も「高校三年生」も「いとしのエリ」も「踊るぼんぼり」も、いっぺんに流行っているのだと思



崔健『新长征路上的摇滚』1989 中国旅游声像出版社

「新长征……」は国内版で、その順番とパッケージを入れ換えたのが海外版の「一無所有」。なかみは一緒で、絶対に聞きのがせない崔健の代表作だ。「一無所有」(持ちものはなににもなし)、「不是我不明白」(俺のわかりが悪いわけじゃない)、「新长征路上的摇滚」(新しい長征の途上で唄うロック)といった曲が、ひととき光っている。中国独特のラップ(早口の伝統芸能で快板というのがある)、伝統楽器(たとえば「一無所有」のチャルメラ)、解放軍の歌や民謡の旋律の流用などを隠し味に、スケールの大きなメッセージ性の強い仕上がりがた。彼にかろうロックーは、日本にいないと思う。バックをつとめるのはADOバンド。「一無所有」のカヴァーは、「一塊紅布」(ひと切れの赤い布)という曲を唄う、赤い布で目を隠した崔健。この曲は、二作目のアルバム「解決」に収められている。



『一無所有』1989 香港EMI



『解決』
1991 中国北光声像芸術公司

「重金属」から アイドルまで

ぬカセットを粗製乱造して飽きられたことが原因である。

中国初のシンガーソングライターとして、いまも人気抜群で活躍中のロックンローラーが崔健だ。彼ははじめオーケストラでトランペットを吹いていたが、八四年頃から自己流で作曲を始める。北京の大使館員の息子たちを中心とするバンド(ADOバンド)と合流して演奏活動を開始、「一無所有」でスターの座を不動のものとした。その音楽性はアジアや欧米で高く評価されており、日本でもこの秋、東芝EMIからCDを発売の予定だ。プリズムのように多義的に受け取れる絶妙な歌詞。強烈なメッセーじ性。既成の権威を恐れない俠気。世界に通用する才能である。崔健に続けとばかり、いま北京は、ロック(揺蕩という)あり、レゲエあり、ラップありのバンドブームだ。重金属(ヘビメタのこと)のバンドも出現、「黒豹」「唐朝」などが頭角を現している。ロックは

斜断機

漫画家の小林よしのりが「週刊SPA」連載中の「ゴーマニズム宣言」で、部落差別の問題を取り上げ（十一月十日、十七日号）、被差別部落出身の芸能人が集まって「ザ・部落ワルトラ解放フェスティバル」を開き、被差別部落出身だからこそおれたちは才能がある、と自分の生まれを堂々と誇る（こと）によって価値観を逆転させるべきだという戦略を描いている。これを橋爪大三郎が「毎日新聞」の二十二日夕刊で取り上げ、「考え方としてはまことに正しく、敬服するほかない」と絶賛した。

だがどうもそう単純ではないという感じをぬぐえない。アメリカの黒人差別撤廃運動で、肌の色という指標を逆手にとって「ブラック・イズ・ビューティフル」と宣言する運動思想があったが、このときも、それでは差別者（被差別者）の壁をかえって高くするだけではないのかという疑問を感じた。しかし黒人は公民権を得ても、黒い肌の持ち主であることを止めるわけではない。そういう条件の絶対的な性格は、いわれなき屈辱感をはねのけるという運動上の

必要性の論理に説得性を与える。だが部落差別問題の場合にはもう少し微妙である。この差別の特殊な点は、差別を根拠づける外的な指標がなんら存在しないところにある。その場合、出自が社会的に無意味化する（このことを究極の解決ではないのか。それは、個人が部落出身者としてのアイデンティティを抹消して市民社会に溶け込んでしまふということと同義ではないのか。どんなに困難でも、黒人差別と違って、この抹消は原理的に可能ではないのか。いくら都会に紛れて普通の市民として生きていても、誰かがきつてきてひそひそやるような現状と闘うには、どうしてもことさらな言挙げが必要とされるのだという反論がある。だがそのあとは？ スターなどの社会的強者の立場にある被差別者が自分の出自を強調すれば、本当に普通の被差別者をも差別しない状態が期待できるのであろうか。解放運動が被差別者大衆を半分しかつかんでいない理由の一つは、出自を顯示する必要と隠蔽する必要との矛盾をうまく解ききっていないところにあるのではないか。（画）

読書



兄弟『青春規制』
北京文化芸術音像出版社
ザ・ピーナツの男性版と
言えばいいのだろうか、
双子のアイドル
「兄弟」のデビュー
アルバムである。
今年の春、
天津でテレビを
観ていたらまたま
「兄弟」が歌番組に
登場して、歌って
踊るところを
披露していた。
一曲目の
「青春規制」は、
井上陽水のカヴァー
だったにして、
思わず
笑ってしまう。
中国は音楽
事務所にあたる
ものがなく、
歌手は歌舞団や
解放軍に所属する公務員だった。
タレントをスカウトしてデビューさせる、
日本のシステムを真似た第一号が
「兄弟」なのである。今後数年して、
彼らがアイドルからどう脱皮していくかも注目したい。



えばまちがない。
ローカルマーケットが
割拠した現状
もうひとつ、地域差も無視でき

ない。中国の音楽の中心地は、北京、上海、広州の三市だが、広州は広東語で香港と同じ。香港の流行歌がもろに入ってくる。北京は普通語、上海は上海語で、互いに通じない。中国の流行歌はだいたい、普通語で歌われることになっており、あとは、南方の広東語という構図だ。
上海ローカルな歌手としては、張行をあけておこう。聞くところによれば彼は、素人ギターコンテストみたいな大会で優勝して八〇年代半ばにプロデビューした。ソフトラーツにサンダースという派手ないでたちで人気を博し、そのあと女性問題を起こして数年刑務所に入ったりしたもの、人気は衰えず女性ファンも多い。長淵剛の歌をカヴァーした日本語（と本人は思わせたいらしいが、ほとんど聞きとれない）の歌など、不思議な曲を集めた専集（アルバム）も出ている。ギターを抱いた渡り鳥「みたいなノリで、ちよつと恥ずかしくて聴いてもらえないが、ここまでくるとかえって新鮮という不思議な歌手だ。

広州ローカルなバンドとしては、達明一派が注目株。広東語のツッパリロックバンドで、香港での人気も高い。
コンサートやカセットは、大勢抱き合わせのベストヒット集みたいなのが主流で、個人専集やリサイタルは多くない。個々の歌手にも、いちおう持ち歌はあるのだが、ひとの歌でもほとんど歌ってしまひ、各地のコンサートや録音スタジオをぐるぐる回っている。北京から全国への流通ネットワークが確立しているわけでもなく、言葉（地方語）の違いもあるので、カセットテープの版元も放送局も各省に散らばっているのだ。
西北風は、日本のGSブームみたいな一過性のものだったようだが、でも、中国発のオリジナル音楽が、着々と力量をつけてきているのは確かだろう。いまのところ崔健ひとりが突出している感のある音楽シーンに、第二、第三の本格的な才能の持ち主が現れて、われわれをあとと驚かせてくれる日を楽しみにしたい。